

「こまつ」 「もん」

komatsu mon

こまつもん 秋・冬 2013 vol.4

2013年12月発行

発行/小松市経済環境部環境王国こまつ推進本部 TEL: 0761-24-8078

編集/チームワフルこまつ

特集

小松を訪れた芭蕉の足跡をたどる

里山自然学校こまつ滝ヶ原

小さな旅 悠久の風渡る、国府をゆく



小松 食の 歳時記

ハレの日の料理 「えびす(べろべろ)」



日本海に面した石川県は海産物も豊富で、いろいろな海藻もよく食べてきた。中でも寒天の原料となるテングサも身近な海藻。寒天の中に溶き卵を流した「えびす(べろべろ)」は、卵がふわっと花開いたように見た目も美しい。小松において身近な寒天と、昔は貴重だった卵の組合せは、お祭りや正月など「ハレの日」のための特別の料理で金沢や能登地方に比べ醤油を少なく透明に仕上げるのが特徴。

正式な名は輪島の伝統菓子「柚餅子」に由来するらしい。手早く作れることから、はやゆべしと呼ばれ「えびす」になまったという。

サイエンスヒルズこまつがプレオープン



平成二五年十二月一日、JR小松駅東側に、科学と交流のまちの拠点として、サイエンスヒルズこまつが完成し、一部オープン(一般開放)します。(平成二六年三月グランドオープン)。サイエンスヒルズこまつは、小松市が「ものづくり精神の継承と科学技術意識の啓発」や「未来に向けた地域の活性化と産業振興」を主なコンセプトとして、科学技術立国を実践する人材の育成、レベルアップを目指し創ったもので、日本海側初の立体視型全天周3Dシアターをはじめとして、ものづくり・科学体験展示ホール、イベントホール、技術工作室、カフェが設置されており、子供から大人まで幅広い年齢層の人々が楽しめる施設となっています。

〒923-8610 石川県小松市こまつ2番地
TEL 0761-22-8610
<http://science-hills-komatsu.jp/>

第3回「環境王国こまつ」米食味コンクールが開催されました



十月二〇日、小松産のお米の品質や味を比べる「環境王国こまつ米食味コンクール」の最終審査が行われ、応募者百十一件の中から、各部門の金・銀・銅賞の受賞者が決定しました。本コンクールは小松産米の品質や生産者意欲を向上させ、ブランド力を高める取組みで、平成二七年秋には「米食味鑑定士協会主催」を小松で開催し、小松産米のコンクール入賞とさらなる知名度アップを目指しています。審査員の一人で一級フードアナリストの里井真由美さんは、「小松のお米は香りが良く、みずみずしく、食感も良かったです。水も土も良いからでしょう。香りもとても良かったです」と小松産のお米を評価されていました。

「有機栽培」
 <金賞> 橋本豊寛
 <銀賞> 橋祥一郎
 <銅賞> 高久輝

米食味
 コンクール
 審査結果

「慣行栽培」
 <金賞> 角谷佐佳恵
 <銀賞> 森茂樹
 <銅賞> 茶谷真悟

「特別栽培」
 <金賞> 川岸次男
 <銀賞> 西太兵衛
 <銅賞> 木崎英紀

里山自然学校

こまつ滝ヶ原

秋の一日、
馬の鞍のような稜線が
美しい鞍掛山の麓、
滝ヶ原で癒される。



鞍掛山の麓に滝ヶ原の
里山の風景が広がる。

最 近、里山に注目が集まっ
ている。里山とは「集
落や人里に接した山」、そして
そのような環境で「人間の影
響を受けて成立している生態
系」をさすこともある。近年で
は、二〇一〇年に国連生物多
様性条約の第十回締結国会議
(COP10) が日本で開催され
たこともあり、環境省が日本の
里山を、自然と人間の共生のモ
デルとして世界へPRしている。
日本海と霊峰白山に囲まれた
水と緑の豊かな小松市は、その
面積の七割程度が里山、奥山

だ。小松市では自然と人との
共存共栄を持続し、発展させ
るため、市民とともに「こまつ
SATOYAMA協議会」を立
ち上げ、そして平成二三年三月
に一三八年の歴史を閉じたかつ
ての那谷小学校滝ヶ原分校と保
育所跡を「里山自然学校こまつ
滝ヶ原」として開校した。ここ
を拠点として里山生き物調査塾、
里山里湖エコツアー塾、里山エ
コアグリ塾、里山グルメ開拓塾
などの塾活動や、山菜検定、ジャ
ズコンサート、「里まなび山あ
そび」など里山の豊かな自然を

活用した様々な試みを行って
いる。また、環境や里山を学ぶ大
学生や外国人の研究活動の受け
入れも行っている。



本山石切丁場。文政の頃より現在まで切
り出され、当時の藩主の土蔵や墓碑を造
るほど良質の石が産出されている。



里山自然学校
こまつ滝ヶ原
の運営委員長、
山下 豊さん。



全国的にも非常に貴重な滝ヶ原のアーチ
石橋群の一つ、「丸竹橋」。

「こ」では地産地消、そしてゲ
リーントゥリズム的な考え方で、
滝ヶ原に来る人とここの住民も参
加して一緒に活動することで、地

里山に秋の気配が色濃くなっ
てきた十一月三日、滝ヶ原で「晩
秋の石文化巡りノルディック&
ウォーク」が開催された。参加
者を引率するのは里山自然学校
こまつ滝ヶ原の運営委員長、山
下豊さん。鞍掛山と滝ヶ原を愛
する、ここの活動の中心的存在だ。
雨が心配されたが、幸いにも
曇り空。暑くもなく寒くもな
く、里山を散策するにはちよう
ど良い気候だ。参加者は山下さ
んの案内で滝ヶ原の里山を歩き
ながら、鞍掛山を眺め、草木に
目を留め、アケビを味見し、アー
チ石橋群を渡り、石切り場の巨
大な空間に驚いた。小学生から
おじいちゃん、おばあちゃんま
で年齢は様々だが、参加者の顔
は生き生きとし、里山の空気が、
鳥の声に癒やされているのがわ
かる。

域が元気になることを目指してい
ます。そのために地域資源を調
査しデータマップ化を行ってき
ました。鞍掛山や滝ヶ原の石の
文化、ハッチョウトンボ、ホト
ケドジョウなど、里山の資源と、
歴史文化を上手く活用し、多額
の投資をせずにゆつくりと活性
化を行っていきたいと思います」
と山下さん。そして「春夏秋冬
の自然を楽しんでもらい、ゆつ
たりとした時間が流れる里山に
身を置いて、自分を見つめ直す
時間をもってもらおうことで、心
も体も健康になってもらいたい」
という。

「神が田園(農村)をつくり、人
間が都市をつくった」というイ
ギリスの詩人ウイリアム・クー
パーの有名なことばがあるが、
里山というのは神と人間の共作
と言えるかもしれない。
里山は人間と自然界をつなぐ
場所。里山の自然に触れること
で、日常生活のストレスが癒や



され、感覚が研ぎ澄まされ、日々
生きていくための活力を与えて
くれる場所なのだと思う。
あなたもぜひ小松の里山、滝ヶ
原で癒やされて欲しい。



月2回、地元の食材を使った里
山食堂がオープン。滝ヶ原のお
母さん(おばあちゃん?)たち
が朝から準備をしてくれる。

里山自然学校こまつ滝ヶ原
▶ MAP [15 ページ①]
〒 923-0335
小松市滝ヶ原町ウ 20
TEL 0761-65-2436
FAX 0761-65-2437
<http://www.satoyama-komatsu.com/>

三二五年前、 小松を訪れた芭蕉の 足跡をたどる

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり」で始まる『奥の細道』。日本人なら誰もが知っている松尾芭蕉の紀行文の冒頭である。

芭蕉は元禄二年三月二十七日（新暦一六八九年五月一六日）に江戸深川の採茶庵を出発し、全行程約二四〇〇キロ、日数約一五〇日間で東北・北陸を巡って元禄四年（一六九一年）



建聖寺に伝わる立花北枝による高さ18センチほどの木製の芭蕉坐像(市指定文化財)。見学は事前のお電話を。建聖寺の門前に「はせを留杖の地」の碑があり、境内には大小の句碑が並んでいる。

建聖寺 ▶ MAP [15ページ②]
石川県小松市寺町94
TEL 0761-21-3170

に江戸に帰った。

奥の細道の終盤、芭蕉が金沢を経て小松を訪れた後、山中温泉に滞在するが、その後、再度小松を訪れている。『奥の細道』の道中で同じ土地を二度訪れたのは小松だけ。当時の小松は、加賀藩三代藩主前田利常が隠居城を構えたことで、小松絹など多くの産業が発展し、町衆の財力と文化度が非常に高く、利常が招いた小松天満宮の別当能順の影響で連歌など文学的素養を持つ人たちが多かったことも理由だと思われる。

秋晴れの日、季節は違うが、今から三二五年前、芭蕉が訪れた小松での足跡をたどってみる。

芭蕉が小松に到着したのは旧暦の七月二四日。その日は近江屋という宿に泊まり、翌二五日、小松を発とうとした芭蕉を小松の人々が引き留め、滞在を延ばし、居所を近江屋から立松寺(建聖寺)に移した。建聖寺には芭蕉塚と立花北枝が彫った芭蕉像がある。北枝は小松の松任町生まれで当時は金沢で研師を業としていた。北枝は金沢から越前松岡まで芭蕉一行と同行し、後



寿永2年(1183年)に現在の地に鎮座した本折日吉神社は神輿が氏子町内をお旅する「お旅まつり」で知られる。「開運魔除け」「鬼門除け」の神様として地元では昔から厚い信仰を集めていて、「山王さん」「日吉さん」と呼ばれ親しまれている。

本折日吉神社 ▶ MAP [15ページ③]
石川県小松市本折町1 TEL 0761-22-0163

拝殿の前には「魔除けの霊力」があると言われる鈴が。お参りする時にこの鈴を振って祈願、感謝する。境内には猿の像が多く見られるが、日吉神社では昔から神様のお遣いの猿を「真猿=まさる」と呼んで尊ぶ。「魔去る」「勝る・優る・賢る」「増える」に通じる縁起の良いものとして多くの人が頭を撫でるのでツルツル、スベスベになっている。



しほらしき名や小松吹く萩薄

に蕉門十哲の一人になっている。

同日、多太神社へ参拝して実盛の甲冑や木曾義仲の願状を見た後、本折日吉神社の神主藤村伊豆に招かれ二日目を過ごし、この伊豆宅で「しほらしき名や小松吹く萩薄」を詠んだ。その翌日は、歓生亭で開かれた句会で歓待されている。

小松滞在四日目は菟橋神社を訪れ、祭礼(西瓜まつり)に詣で、その後、再度、多太神社を訪れて「むざんやな甲の下のきりぎりす」の句を奉納している。

平家の老将斎藤別当実盛はもとは源氏の武将で、幼少の義仲が一族の争いで殺されかけた時、その命を救い木曾に逃がしてくれた恩人だった。その後、実盛七三歳の時、寿永二年(一一八三)。京都に向かう義仲軍は俱利伽羅峠で平家の大軍に大勝し、加賀に入った。抵抗する平家軍を義仲軍は篠原の戦いで打ち破ったのだが、その時、平家の武将だった実盛は、若武者として戦いたいという思いから白髪の手を黒く染めて出陣したが討死する。首実検で義仲が血に染まった首を池で洗わせたところ、白髪が出てきて実盛と

「お旅まつり」で有名な菟橋神社。地元の人からは「お諏訪さん」と呼ばれて親しまれている。西瓜まつりの祭礼の日(旧暦7月27日)に芭蕉一行が立ち寄った。「しほらしき名や小松吹く萩薄」の句碑が神社入り口の脇に残されている。

菟橋神社 ▶ MAP [15ページ④]
石川県小松市浜田町イ233
TEL 0761-24-2311



那谷寺は養老元年(717)に創建された古刹。平安中期に花山法王が訪れ、岩窟観音菩薩を拝し、西国33ヶ所観音霊場の第一番那智山青岸渡寺の「那」と第三十三番谷汲山華嚴寺の「谷」をとって那谷寺と改めたという。秋には前景の紅葉と白い岩肌の奇岩遊仙境とその背後の緑のコントラストが美しい。芭蕉も『奥の細道』に「奇石さまざまに、古松植ならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。」と記し、褒め称えている。



那谷寺 ▶ MAP [15 ページ⑥]
石川県小松市那谷町 122
TEL 0761-65-2111



那谷寺の境内には頭をなでると吉籬がサル、ご縁(猿)が授かると好評のサルがいるので探して見てください。



石山の石より白し秋の風

(※)この書簡に塵生が贈った乾うどん(小松うどん)のお礼をそえるかたちで、小松天満宮へ発句奉納依頼の件を承知したと書かれている。

万子の案内で能順と会ったと言われている。この後、金沢から付き添ってきた北枝は、大聖寺を経て越前松岡まで芭蕉を送って別れた。

今でも小松には『奥の細道』ファン、芭蕉ファンが多く訪れ、芭蕉が賞賛したと言われる小松うどんは地域グルメとして愛されている。

俳句は世界最短の定型詩と言われ、日本だけでなく海外でも Haiku と称され愛好者も多い。しかし、趣味が多様化している現代、伝統的な俳句に留まらず、異なるものを組み合わせ、新しい俳句の世界を広げようと、小松市では昨年開催した奥の細道こまつサミットを契機に、「俳句」と「写真又は絵」を組み合わせた小松ビジュアル俳句コンテストを開催している。先日、那谷寺が「おくのほそ道の風景地」として国の名勝に指定されたこともあり、『奥の細道』を通してさらなる交流人口の増加が期待される。



小松天満宮の「願かけ撫牛」。撫でると願いが叶うと言われている。

加賀藩三代藩主前田利常が小松城に隠居した時、前田家の氏神の菅原道真を祭神として、小松城鎮護のために京都の北野天満宮を四分の一に縮小して創建したのが小松天満宮。本殿・拝殿、神門などが国の重要文化財になっている。神門に向かう参道に「あかあかと日は難面もあきの風」の句碑がある。

小松天満宮 ▶ MAP [15 ページ⑦]
石川県小松市天神町 1
TEL 0761-22-2539



実盛の兜
(多太神社所蔵・国指定重要文化財)

高さ12.5センチ、重さ4.4キログラムの兜の中央に、八幡大菩薩の神号を浮き彫りにした精巧な造り。目庇から吹返しまで、菊唐草の彫刻に金を散りばめ龍頭の飾金具と鍬形の角が打ちつけてある。実盛が討死の後、木曾義仲が祈願の状文に添えて多太神社に奉納された。明治33年に国宝に指定された時に一度解体修理され、昭和25年には重要文化財になった。

むぎんやな甲の下のきりぎりす

知り、「あなむぎんやな」と涙を流したのは謡曲「実盛」の名場面だ。芭蕉の句はそれから採られたもので、初句は「あなむぎん甲の下のきりぎりす」だった。芭蕉は平家物語によほどロマンを感じていたらしく、『奥の細道』の旅で、義経主従が討死した奥州の高館や、義経の忠臣佐藤藤経の旧跡など、平家物語ゆかりの地を多く訪ねている。平家物語の人物の中でも特に義仲に心酔していたようで、遺言により近江の義仲寺にある木曾義仲の墓のそばに芭蕉は埋葬されている。『奥の細道』の日本海側の旅は義仲が京へと上がった「木曾街道」をたどる旅でもあった。

多太神社で句を奉納した芭蕉はその日に山中温泉に着き、八月四日まで滞在した後、再び小松に向かう途中、那谷寺に詣でて「石山の石より白し秋の風」を奉納した。小松に引き返した理由は諸説あり、小松の俳人塵生に宛てた芭蕉の書簡(※)には天神奉納発句のため、曾良随行日記では生駒万子に会うためとなっている。万子は小松天満宮の別当能順の弟子で、芭蕉は

多太神社は創祀が遠く古代までさかのぼる古社で、社縁起によると6世紀初め武烈天皇5年(503)に男大跡王子(後の継体天皇)の勸請によると伝えられ、平安時代初期には延喜式内社に列している。

多太神社 ▶ MAP [15 ページ⑥]
石川県小松市上本折町 72
TEL 0761-22-4089



実盛の兜など多くの宝物が保管展示されている多太神社の宝物館で、詳しく説明をしていた実盛の兜保存会会長の中山哲郎さん。実盛の兜を見学希望の方は事前に電話予約を。(有料見学)
TEL 0761-22-5678

悠久の風渡る、国府をゆく

小松市の北東部、国府地区。
ゆるやかな丘陵が広がり、風光に恵まれたこの地はかつて加賀国府がおかれたところ。いにしえより紡がれてきた歴史ロマンに触れる旅。

梯川かほがわの向こうに白山の美しい山容。起伏に富んだ土地。石器時代には人々が高台で暮らし、古代には加賀国府がおかれ、近代では建機メーカー、コマツのルーツである遊泉寺銅山で栄え

るなど、小松の歴史の中には幾度となく国府地区の名が登場します。のどかで美しく、ディープな歴史が詰まった、そんな国府を訪ねます。

ここは地獄か極楽か

まずは地獄めぐりで知られる「ハニベ巖窟院」。古墳時代からこのあたりは石材の産出地で、周辺の山中には石切場跡がいくつも残っています。ハニベ巖窟院もそのひとつ。かつての石切場につくられた地獄へ、いざ出発。洞内に足を踏み入れると、しつ



ハニベ巖窟院のシンボルである高さ 15m の仏頭。



とりとまとわりつくような冷気が体を包みます。天井や壁には、石工たちの手で刻まれた無数のノミの跡。暗闇に照らし出される数々の仏像、鬼気迫る閻魔大王、そして鬼たちが繰り広げるおどろおどろしい地獄絵図。これらの作品群は日展作家だった初代院主、故・都賀田勇馬氏と二代目伯馬氏の手によるもの。開洞は昭和二六年。当時金沢在住だった勇馬氏がこの地の知人を訪ねたとき、この洞窟に出合ったそうです。その神秘的な空気に芸術家としての魂を揺さぶられ、ここに仏像を並べて一大伽藍をつくろうと決意。家族に「おれは一年ほど小松のほら穴に閉じこもるから、お前たちはなんとか生活しておれ」と言い残して鍋と七輪を手に洞窟に入り、ロウソクの灯りを頼りに一人黙々と二十体近くの像を作り続けたのでした。戦後、平和の願いを込めてつ

くられたこの巖窟院。静かな折り、人の愚かさ、不気味さ、そして可笑しみ。きれいな事だけではない、そんな混沌とした人間臭さが洞内に満ちていて、居並ぶ像は訪れる人の心の中をじっと見つめているようでした。



売店ではハニベ焼を販売。深々と頭を下げたどこかユーモラスな「おじぎ福助」は初代勇馬氏のデザインで、開洞以来のロングセラー。

ハニベ巖窟院
▷ MAP[15 ページ⑧]
小松市立明寺町イ1
TEL 0761-47-3188
営業時間 / 4～9月 9:00～17:00、
10～3月 9:00～16:00
定休日 / 無休
料金 / 大人 800 円、小人 500 円



利常が愛した三宅野の眺望

加賀産業開発道路に出て北へ。舟見ヶ丘保育園そばの交差点の北東角に、こんもりと木々が茂る一画があります。ここが「前田利常公灰塚」。丘の頂上付近にあたり、白山の遠望と田園風景が美しい場所です。

加賀三代藩主前田利常は、小松城下を整備して産業文化を奨励し、小松の礎を築いた人物。製茶に力を入れた利常は、茶の栽培に適したこの三宅野(埴田町)に茶畑を拓かせました。風光明媚なこの地をたいそう気に入り、遺言によって利常の亡骸はここで火葬され、遺

骨は金沢野田山に、残りの灰はこの地に葬られました。郷土資料『ふるさと国府』によれば、かつては外周に堀がめぐらされ、小松城のある西方に向けて長い参道があり、墓参りの際には小松城から灰塚まで白布を敷きつめたとか。灰塚は周辺の開発にともなって敷地が縮小され、遺灰も昭和二八年に野田山へと移転。現在は、加賀産業開発道路のすぐそばに「加越能国主 従二位 前田利常公灰塚之址」と刻まれた石碑が木々に囲まれてひっそり立つのみとなっています。

地域の人々が守り継ぐ泉

加賀産業開発道路をさらに北へと進みます。国府台への上り坂の手前を右に折れたところにある「桜生水」は、名水百選のひとつ。かつて泉のほとりに桜の大木が枝を広げていたことが名の由来です。時を経て由来となった桜は切られたものの、国府小学校の校歌で「桜泉の真清水の」と元気に歌い継がれ、湧水は地元の保存会の人々の手で大切に守られて今に至ります。澄みきった泉の傍らに祠があり、



桜生水では毎年6月に野点茶会が開催される。▷MAP[15ページ⑨]

中にはお地藏さまが。みずみずしい野花が活けられており、手入れが丁寧に行き届いていることがうかがえます。祠にノートが備え付けてあり、「大阪から石川に来るたびに汲みに来ます」、「立明寺町からほぼ毎日歩いてお参りに来る八五歳です」などさまざまな人が桜生水への思いを記しています。保存会メンバーが訪問者に昔話を披露したほのほのエピソードなども綴られ、市内外のファンはもちろんのこと、地域の人々の素朴で深い愛情をそこに感じたのでした。

古代のロマンに想いをはせる

桜生水から国府台への坂道を上りきった先に「河田山古墳群史跡資料館」があります。国府台団地の造成にともなう調査で、台地一帯に四七世紀に築かれた六二基の古墳が発見されたのは昭和六一〜六二年のこと。なかでも全国で例のないアーチ型石室をもつ古墳が見つ



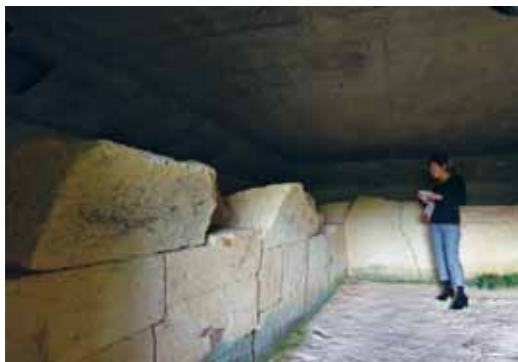
館内には周辺で出土した石器時代から奈良時代にかけての遺物を展示。

河田山古墳群史跡資料館
▷MAP[15ページ⑩]
小松市国府台3-64 TEL 0761-47-4533
営業時間／10:00～17:00(入館は16:30まで。12～2月は15:30)
定休日／水曜(祝日の場合は翌日)
年末年始(12月29日～1月3日)、展示替え・整理期間
料金／無料

かり、当時大騒ぎになりました。七世紀、古墳時代後期に築かれたアーチ型石室は、朝鮮半島の王墓の影響が色濃く、埋葬されたのは天皇にかなり近い人物と考えられるとのこと。しかも石室の入り口は白山の方向に向けられており、白山信仰の発祥とも関係があるのではないかと

と、未だ残るさまざまな謎に、ロマンがかきたてられるのです。二基の石室はそれぞれ資料館の内外に移築保存され、見学ができます。「この地は古代から天皇家に近い有力者がいて、後に国府もおかれたところ。古代小松の歴史すべてがここにありんです」と丁寧な解説をして下さった職員の室梅義泰さん。幾重にも連なる山並みの向こうに白山がそびえるこの光景は、古代も現代も同じ。古墳の丘を吹き渡る風は、まさに悠久の風。

◀館長の「間近で見て、手で触れて、歴史を感じてもらいたい」との考えから、資料館そばに移築された河田山12号墳は石室の中に入って見学ができます。鍵がかかっている時は、資料館受付に声をかけを。



「おいしい」の笑顔が見たくて

国府台の住宅街に佇む「菓子工房よどがわ」は、昨年十二月にオープンした小さなケーキ屋さん。オーナーの淀川栄美子さんは、献上加賀棒茶で知られる加賀市の丸八製茶場と親戚という縁もあって、以前は製茶場併設の喫茶でお茶請けを作っていました。

淀川さんのスイーツは、加賀棒茶をはじめ無添加の生クリー



菓子工房 よどがわ
▷MAP [15ページ⑪]
小松市国府台2-96 TEL 0761-47-0883
営業時間／10:00～19:00
定休日／月曜、火曜
(祝日の場合は営業し、水曜休業)



加賀棒茶の香ばしさが際立つ「いぶろーる加賀棒茶」。淀川さんの人柄のようにふんわりと、そして存在感のある味。

ム、徳島の阿波和三盆など、材料に徹底的にこだわり、手間を惜しまず手づくりした逸品揃い。シンプルなのに素材の風味が詰まっています、それはそれは優しく豊かな味わいです。納得のいくものを作るため「作業していて気付くと二時、三時ってことも。お菓子作りは奥が深く」と困った顔で笑いますが、彼女の睡眠時間が減れば減るほど、お客さんの笑顔は増えるのかもしれない。とはいえず、ファンのためにも身体には気を付けて、淀川さん。

店内には小さな喫茶スペースがあり、毎月末には五百円でドリンクとスイーツが味わえるワンコインデーも開催しています。

◀「九州に食べられるイグサがあるんですよ。将来小松のイグサでも、何か作れるかも」。アイデアは尽きません。



空の駅こまつ
 ▶ MAP [15 ページ②]
 〒 923-0993
 小松市浮柳町ヨ 50 番地
 小松空港ターミナルビル内
 TEL 0761-24-0831
 営業時間 / 空の駅こまつ(1階) 7:15 ~ 19:35
 空カフェ(2階) 7:15 ~ 19:35年中無休



ネビュレの特殊製法で果肉感・食物繊維たっぷりのトロトロプチプチ新食感のジュースも注目です。



和菓子教室など、様々な体験教室も定期的に行われる。



オープニングセレモニーで挨拶する和田 慎司小松市長。

空の駅こまつ がオープン!

六次産業・地域産業・交流の拠点としての期待を担って

利子さんは、「小松には農産物や伝統工芸など、日本全国、そして世界にも誇れる素晴らしい素材がたくさんあるので、今後もおお客様の声をキャッチしながらその素材をブラッシュアップし、もっとお客様に喜んでいただき、口コミで「空の駅こまつ」そして小松の魅力が広まっていくなりに努力していきたい」と今後の抱負を語ってくれた。「道の駅」が一九九三年に登場してから今年でちょうど二〇年。「道の駅」は地域産業振興の拠点、人びとの交流の拠点として、地域に根差しながら進化を遂げ、地域の人だけでなく多くの観光客も惹きつける重要な存在となっている。小松市でも二〇一〇年四月に、「道の駅こまつ木場潟」がオープンし、連日多くの地元客、観光客が訪れ、地産地消、地産他消、そして小松の観光物産情報の発信拠点として大きな役割を果たしている。今回オープンした「空の駅こまつ」は「道の駅こまつ木場潟」と合わせて、小松の魅力をより効果的に発信する拠点となることとが期待されている。

こまつオータムスイーツガーデンを開催

九月一六日、小松市は農業の六次産業化を推進する一環として、小松産大麦を使ったスイーツイベント「こまつオータムスイーツガーデン」を開いた。小松市内の菓子店三〇店が参加し、新規に開発した三〇種類のケーキやパン、和菓子が開発され、市民のために用意された二八〇席はほぼ満席となり市民の地産地消のスイーツへの関心の高さがうかがえた。コンテスタの合間に北陸学院大学食物栄養学科学科長の新澤祥恵教授の講評と大麦についての講演があり、参加者はあらためて地産産の大麦の栄養・効能について



「安心・安全・おいしい」の証 小松ブランドロゴマーク。

認識を新たにした。試食の際にはアンケート用紙も一緒に配られ、試食した商品の感想は参加した菓子店にフィードバックされ、今後の商品開発の参考にされた。その中の一部は新規オープンした「空の駅こまつ」でも販売されている。



大盛況となったホテルサンルート小松の会場。

今年の十月一日、小松市の食と観光情報を集めたアンテナショップ「空の駅こまつ」が小松空港ターミナルビルでオープンした。小松空港は年間二〇〇万人が利用する北陸の空の玄関口。その好立地を活かし、環境王国こまつに認定されている小松産の農産物を加工した様々な六次産業商品の他、生鮮野菜、果物、日本酒や日本を代表する伝統工芸品の九谷焼などの豊富な品揃えと、情報発信コーナー、和菓子教室などの体験コーナーを設置することで、小松の幅広い魅力を発信する。また二階には「空カフェ」もあり、小松産のお米など地元農産物を使ったメニューを提供する。小松市では今年の一月から四回に亘って期間限定の「空の駅」を試験設置し、利用者アンケートをもとに開業準備を行い、今回のオープンでは、ネビュレ社(東京)の加工技術を活用したジュースやパンなども新登場した。空の駅こまつ駅の駅長・小見麻

加賀白ねぎ農家
新田武志

小松市浮柳町丙44
TEL:0761-22-4953

MAP [15ページ] ⑬

小松空港がある小松市の浮柳町。梯川と前川の合流点に近く、明治初期に編纂された『皇国地誌』に地味は「概ネ砂ニシテ其質悪ク、水利不便ナリ」とあるように、砂地の土地が広がる。

その浮柳町で四代に渡って農業を続けるのが新田武志さん（四〇才）。

新田さんは稲作の他、すぐり菜も作っているが、メインとなるのは「加賀白ねぎ」。浮柳町の水はけの良い砂地がネギの栽培に適していて、この土地で育てた「加賀白ねぎ」は、シャキシャキした歯ごたえと、独特の甘味と苦味が絶妙で生でも煮ても焼いても美味しい。子どもの頃から両親の農作業の姿を見ていて、小さい頃から農業を継ごうと考えていた新田さんだが、大



収穫したばかりの加賀白ねぎを手にする新田武志さん。



その名のとおり白い部分が美しい加賀白ねぎ。

で、農業も理詰めで考えることが多いですね。数字を追いかける。原因を追求する。理論を考える。だからいつも何でもモモしますよ」と新田さん。そんな新田さんだが、就職後はお父さんから一から農業を教えてもらいながら、それでもわからないことがあれば、近所の農家に聞いたりしながら勉強したそう。失敗も多くしたが、常に日誌に記録し、失敗の原因を追求し、翌年に栽培に活かした。昔はお父さんと農業のやり方で対立することもあったそうだが、今は自分の意見は言うけれど、お父さんを立てながら上手くやるようにしているそう。

農業を始めたころは、地道な作業で人付き合いもいらないかなと思っていたが、販売してくれる人たちが生産組合の人たちとの人間関係も大切で、その関係から学ぶことも多いという。

将来の夢は？と尋ねると、「自分個人のことよりも、日本の農業がどうなるかが不安で、新規就業者が増えるような環境作りをしていきたい」と語ってくれた。

---Editor's Choice---

● 編集部おすすめ情報 ●

小松うどん道場
つるっとの「小松うどん」



勸進帳うどん(丸芋磯部揚) 780円

本誌「芭蕉特集」でも紹介した松尾芭蕉が称賛した「小松うどん」を地域ブランドとして発信するために、平成二二年十月にJR小松駅の高架下オープンしたお店。十月中旬になると小松産の新麦を使った文字どおりの「小松うどん」を味わえる。「このうどん、第二回「全国」当地区「どんサミット」で、全国各地の名物うどんを抑えてグランプリを受賞していて、「小松うどん」特有のモチモチ、ツルツルの食感と、少し甘目ながら味わい深い出汁は、「なるほどグランプリ」と納得させられる。JR小松駅をご利用の際は、ぜひお立ち寄りください。



小松うどん道場 つるっと
MAP [15ページ] ⑭
小松市土居原町 13-18
TEL 0761-23-2217
営業時間: 月~火 10:30 ~ 19:00
水 10:30 ~ 14:00
木~日 10:30 ~ 19:00

石川県小松市

① 里山自然学校こまつ滝ヶ原

② 建聖寺

③ 本折日吉神社

④ 菟橋神社

⑤ 多太神社

⑥ 那谷寺

⑦ 浅井暖古戦場

⑧ ハニベ蔵宮院

⑨ 桜生水

⑩ 河田山古墳群 史跡資料館

⑪ 菓子工房 よどがわ

⑫ 空の駅こまつ

⑬ 加賀白ねぎ農家 新田さん

⑭ 小松うどん道場 つるっと

環境王国こまつ

「環境王国」とは、米・食味鑑定士協会や大学教授など有識者による「環境王国認定協議会」が、自然環境と農業のバランスが取れ、安心な農産物の生産に適した環境を認定するものです。

列車・バス・車で

東京	新幹線(越後湯沢経由)	4時間20分
東京	新幹線(米原経由)	4時間
東京	高速バス(八王子行き)	8時間50分
大阪	特急電車	2時間10分
大阪	高速バス	4時間10分
大阪	車	3時間30分
名古屋	特急電車	2時間10分
名古屋	高速バス	3時間10分
名古屋	車	2時間30分

※ JRの時間は最速列車の場合です。

topics

第十五回米・食味分析鑑定コンクール・国際大会
特別優秀賞

小松市那谷町
木崎英紀さん
角谷佐佳恵さん



米・食味鑑定士協会が主催する「第十五回米・食味分析鑑定コンクール・国際大会」

食味分析鑑定コンクール・国際大会が二〇一三年十一月二三日に宮城県七ヶ宿町で開催され、那谷町の木崎英紀さんが都道府県代表お米選手権部門で、角谷佐佳恵さんが環境王国部門で、それぞれ特別優秀賞を受賞されました。表彰状を手にし、木崎さんは「努力した結果が評価されてうれしい」と話していた。

